

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：35308

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25870978

研究課題名(和文) 中山間及び離島地域における小地域ネットワーク活動の継続に関する研究

研究課題名(英文) A study on continuity of community activities in small mountainous/intermountain areas and islands

研究代表者

黒宮 亜希子 (Kuromiya, Akiko)

吉備国際大学・外国語学部・講師

研究者番号：50435038

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、急速な人口減少と高齢化が進む中山間・離島地域における小地域ネットワーク活動の現状及びその効果的な活動の継続について明らかにすることである。研究成果として、地域住民や要援護者を支える集団支援(例：ふれあい・いきいきサロン活動)、さらに、要援護者へ個別の働きかけを行う個別支援(例：見守り活動)双方が有機的に連携をしながら活動を継続することが重要であることが明らかになった。さらに、中山間・離島における地域包括ケアシステム構築の際の、小地域ネットワーク活動の重要性についても実証的に確認することが出来た。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify the present condition and the effectiveness of community activities in small areas, activities such as Fureai- Iki Iki Salon and Mimamori Activities (keeping an eye on neighbors) in mountainous/intermountain areas and islands which are facing rapid depopulation and aging. The study reveals that group support such as Salon Activities and individual support such as Mimamori Activities to assist local residents and people who need small support on daily basis have to be linked and performed continually to be affective. Furthermore, the importance of community activities in small areas in trying to construct the Integrated Community Care System (Tiiki Houkatsu Care System) in mountainous /intermountain areas and islands was verified through empirical approaches.

研究分野：福祉社会学、地域福祉

キーワード：小地域ネットワーク活動 中山間地域 地域福祉 見守り活動 ふれあい・いきいきサロン活動 地域包括ケアシステム 阻害・促進要因

1. 研究開始当初の背景

近年、日常圏域で取り組む、「住民同士の見守り」や「集いの場づくり」といった小地域ネットワーク活動の必要性は日々高まっている。その背景には、急速な人口の減少と高齢化、さらには世帯の単身化がある。特に中山間及び離島地域においてはその傾向はより強く、高齢者の独居世帯の割合についても著しく高いことがその特徴である。

小地域ネットワーク活動の具体的な例としては、個別援助としての「近隣住民による要援護者の見守り活動」、「住民同士の安否確認活動」、「住民ボランティアによる配食サービス」らが挙げられる。集団援助としては、「ふれあい・いきいきサロン活動」が代表的である。いずれの活動も、運営する地域住民の主体性に任されていることから、地域ニーズに即した実に多様な活動が小地域ネットワーク活動といえる。しかしながら、現実には、一度活動を開始した後の持続性や継続性も含め多くの課題がある。

地域包括支援システムの構築が進められる昨今、小地域ネットワーク活動は益々重要な位置づけを担うと考えられている。この傾向は、人口減少が進む中山間地域や島嶼部において顕著である。その理由の一つとして、中山間や離島地域は、フォーマルな社会資源が都市のそれと比較すれば総体的に少ないという現実がある。地域内のインフォーマルな社会資源(ヒト・モノ等)を活用しながら、地域住民の安全・安心な暮らしを守るという目的においても、小地域ネットワーク活動の位置づけは今後益々重要となるであろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、急速に人口減少と高齢化が進む中山間及び離島地域における小地域ネットワーク活動の効果的な継続について実証的に解明することである。特に、小地域ネットワーク活動を開始した後の持続性・継続性が大きな課題となっているため、活動の阻害要因と促進要因を定性的・定量的研究の双方のアプローチから検証し、中山間及び離島における小地域ネットワーク活動の効果的な継続の方法について議論することまでを研究の射程とする。

3. 研究の方法

研究の方法としては主に以下3つの方法をとった。

(1)文献研究

岡山県内の過疎指定地域の実態や、中山間地域の地域包括ケアシステムに関する先行研究をまとめた。

(2)定性的研究

岡山県内にて、小地域ネットワーク活動に関わる対象者(地域住民、専門職)への聞き取り調査を実施(半構造化面接調査)、活動

の継続に影響を与えている概念(規定因)の抽出を行った。対象者は、ふれあいサロン活動に長年携わるリーダー(住民)や、専門職(地域包括支援センター、市町村社会福祉協議会ら)である。

(3)定量的研究

主に岡山県内の中山間地域を調査地とし、質問紙調査(地域住民対象)を実施した。

4. 研究成果

研究成果は、主に次の6点にまとめられる。

(1)過疎化が進行する中山間地域における地域包括ケアシステムの在り方と小地域ネットワーク活動の重要性

先行研究レビューにより、元々社会資源が物質的に少ない中山間地域において、住民同士の連携は不可欠であること、さらに都市部に比べると住民と専門職等の間で顔の見える関係が成り立ちやすいからこそ、小地域ネットワークを基礎とした地域包括ケアシステムの構築においては強みが多いことが明らかになった。

(2)見守り活動の位相と重層的な繋がり的重要性

岡山県内の中山間地域を含むA市において、住民の小地域ネットワーク活動に関わる専門機関(市町村社会福祉協議会、地域包括支援センター)を対象としたインタビュー調査(半構造化面接調査)の結果をデータ化し、分析した。結果、「見守り活動」には複数の「水準」があり、その実態やその段階には明確な、「層」、「グラデーション」が多重に存在していることが明らかになった。見守り活動が地域内で機能する鍵としては、重層的な要援護者に対して早期からの複数のアプローチ(住民の多くの目)が重要であることも併せて確認された。

(3)見守り活動の開始とその継続に影響を与える4つの要因

上記(2)のインタビューデータをさらに分析したところ、見守り活動の立ち上げとその後の活動の継続には、次の4つの要因が影響を与えていた。その4つは、本人要因(要援護者自身)、家族要因、地域要因、専門機関要因であった。

本人要因とは、要援護者自身が近隣との関係性が元々ある(良い方向に)、また本人が元気な時に地域に対して貢献していたこと等であった。家族要因とは、要援護者自身と家族(別居の場合でも)の関係が比較的良好であること等が重要な要素であった。地域要因とは、昔からの集落の雰囲気(つきあい有り・人が入りやすい)や、住民同士が集まる「機会」や「場」が現在も確保されていること、また、地域内に住民が共同で管理する資源(氏子等)が存在していることであ

った。専門機関要因の内訳は、小地域ケア会議の有無と頻度、そこでの他機関での情報共有の量と質等の要因であった。

(4)地域における見守り活動の阻害と促進要因

岡山県内の中山間地域 A 市 B 地区において、見守り活動に実際に関わる地域住民（民生委員、福祉委員、住民ボランティア）を対象とし、その実態について質問紙調査（自由記述ベース）を実施したところ、見守り活動の促進要因は、「近隣住民との普段からのつきあい、挨拶や声かけ」、「家の明かりや、在宅か否かを日常的に見てまわる、不在しがちの住民については話題にし、確認を行う」ほか、「回覧板をまわす、回覧板を渡す際にはポストに入れず手渡しをすること」等であった。反対に、見守り活動を難しくしている最大の要因（阻害要因）は、近隣同士が顔なじみである中山間地域においても、「個人情報、プライバシー保護の問題」であった。

(5)ふれあいサロン活動の地域における波及効果（生活リスクに対する予防の視点から）

岡山県内の C 市（市内に島嶼部含む）において、ふれあいサロン活動に取り組む住民を対象とし、インタビュー調査を行った。その研究成果により、ふれあいサロン活動は、つながりが薄れゆく地域において、退職後の高齢者の集い場としてのみでなく、重要な社会参画、社会参加の場となっていた。さらに、見守り・支え合いの拠点としてのサロン、生活リスクに備えるという点で、サロンを介しての日常的な住民同士のやりとりは、潜在的な住民の生活ニーズの把握、お互いの生活課題の理解に大変役立っていることが明らかになった。サロンを起点に複数地域内に住民が集う場があれば、住民の情報は自然に入ってくるため、結果的に閉じこもり、社会的孤立を防ぐことにも繋がっていた。また、住民の情報を交換し、自然災害に関する情報共有（要援護者の避難支援含む）の場にもなっていることも明らかになった。

(6)ふれあいサロン活動を担うボランティア住民が感じるサロンの活動効果とその規定因

サロンボランティアを対象とした質問紙調査の分析結果より、サロンが「地域住民の集い・交流の場」となっていることは明らかであるが、サロンで互いが顔見知りになり、基礎的な信頼関係が築かれた後に「地域の見守りや情報収集の場」に繋がっていることも併せて確認された。いわば、日頃交流がない、交流機会が少ない地域に、見守りや地域の支え合いの活動は醸成されないという点である。岡村重夫が説く「一般的コミュニティ」が形成されていない地域において、要援護者を中心とした見守りや軽微な助け合いといった、いわば「福祉コミュニティ」的な要素

はまさに展開しにくいことが明らかになった。

さらに、「ふれあいサロンの効果」に着目し、その活動に対する効果の実感がどのような心理社会的要因に支えられているか量的調査に基づく分析（多変量解析）を行った結果、「サロンの効果実感」に影響を与えていたのは、サロン活動を担うボランティア自身が、「自分を活かす活動」という、自身の能力がサロン活動を通じて発揮できるという心理的な要因であった。サロンの担い手として活躍する住民は、仕事を通じて社会で活躍してきた高齢者が大半であり、退職後も彼らは元気ではつつとしている。サロン活動も他のボランティア活動と同様、活動を通じて楽しさをボランティア自身が感じなければ、継続することが徐々に難しくなる。サロン活動を通じた、地域参画、社会参画から得られる満足感が、サロン活動の効果そのものの効果実感を押し上げていることが明らかになった。

以上の研究成果から、人口減少と高齢化が進む中山間や離島を含む地域においては、見守り活動を代表とする「点」を増やしていく個別支援、ふれあいサロンのように地域内に「場」をもたらす集団支援、ともに不可欠な活動であり、それぞれ活動の立ち上げや継続には上述のような「コツ」があることが示された。

また、小地域ネットワーク活動の重要性は、地域包括ケアシステムの必要要素である「生活支援（サービス）の充実」の視点からも、それぞれの支援（個別・集団）の機能を強化することと同時に、リンクさせながら活動を進めていくことが重要であることも併せて示唆された。さらに、都市部に比べると専門機関・専門職と住民の間で顔の見える関係が成り立ちやすい地域特性が存在するからこそ、小地域ネットワーク活動の活動主体（団体・住民）と、専門機関・専門職とがより強固に情報共有を含めて連携していくことが、中山間及び離島を含む地域における地域包括ケアシステムの構築において欠かせない視点であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

黒宮 亜希子、ふれあい・いきいきサロンボランティアの自由記述にみる、サロン活動の効果実感について、吉備国際大学保健福祉研究所研究紀要、査読無、第18号、2017、印刷中

黒宮 亜希子、小地域ネットワーク活動の地域における効果に関する研究 - ふれあい・いきいきサロン活動を対象として -、グローカルデザイン論攷= Glocal Design Studies、査読無、第2巻第1号、2017、pp.25-34

黒宮 亜希子、中山間地域における生活支援と見守りについての一考察、グローバルデザイン論 5 = Glocal Design Studies-、査読無、第 1 巻第 2 号、2016、pp.7-14

黒宮 亜希子、地域における見守り活動の現状に関する一考察～岡山県 X 市 Y 地域、民生児童委員・福祉委員らの自由回答データをもとに～、吉備国際大学研究紀要 人文・社会科学系、査読無、第 25 号、2015、pp.93-102

<http://kiui.jp/pc/kiyou/kiyou-no25/kiyou-no25.html>

黒宮 亜希子、小地域ネットワーク活動の現状と課題～ふれあい・いきいきサロン住民ボランティアを対象とした質問紙調査より～、福祉おかやま、査読無、第 30 号、2013、pp.2-10

〔学会発表〕(計 9 件)

黒宮 亜希子、中山間地域における「見守り」に関する探索的研究 - 専門職へのインタビュー結果をもとに -、日本社会福祉学会中国・四国地域ブロック第 48 回山口大会、2016 年 7 月 2 日、宇部市民会館 (山口県・宇部市)

Akiko Kuromiya, How Can “Mutual Help” Work in Aging Communities in Japan? : A Case Study Targeting City A, Okayama Prefecture, Japan, 2016 Joint World Conference on Social Work, Education and Social Development, 2016.6.27-28, Seoul (The Republic of Korea)

黒宮 亜希子、中山間地域における見守り活動の促進・阻害要因に関する一考察、福祉社会学会 第 13 回大会、2015 年 6 月 14 日、名古屋大学 (愛知県・名古屋市)

黒宮 亜希子、中山間地域における見守り活動の現状と課題 - 住民の自由回答にみる「見守り」のかたち -、日本社会福祉学会 第 63 回秋季大会、2015 年 9 月 20 日、久留米大学 (福岡県・久留米市)

Akiko Kuromiya, How can aging communities stay safe? : A qualitative study targeting health/community welfare professions in Japan, 2015 The Joint Regional Conference APASWE & IFSW Asia Pacific, 2015.10.22-23, Bangkok (Thailand)

黒宮 亜希子、地域における見守り活動の阻害・促進要因に関する探索的研究 - 専門職を対象としたインタビュー調査をもとに -、2014 年 11 月 30 日、日本社会福祉学会第 62 回秋季大会、早稲田大学 (東京都・新宿区)

Akiko Kuromiya, How does an aging Japanese society stay safe and secure? ~ A quantitative study on the effects of community activities ~, 2014 The Joint

World Conference on Social Work, Education and Social Development , 2014.6.9-12, Melbourne (Australia)

〔図書〕(計 1 件)

Akiko Kuromiya, Depopulating/Aging Regions and Lifestyle Risks: An Approach to Safety/Security through Community Activities in Japan, Raymond K. H. Chan, Lih-rong Wang, Jens O. Zinn edited, Social Issues and Policies in Asia: Family, Ageing and Work , Cambridge Scholars Publishing: Chaper4, 2014, pp.55-76

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

黒宮 亜希子 (KUROMIYA, Akiko)
吉備国際大学・外国語学部 外国学科・専任講師

研究者番号 : 5 0 4 3 5 0 3 8